

論文要旨

令和6年3月1日

都市イノベーション専攻	氏名	高橋 知
論文題目	郊外住宅都市におけるエコミュージアムの学習活動の効果に関する研究 ー神奈川県茅ヶ崎市における考察ー	
和訳または英訳	Study on the learning effects of ecomuseum in a suburban residential city - A case study in Chigasaki city, Kanagawa prefecture -	
<p>本論文は、関係性の希薄化と高齢化の進行が問題となる郊外住宅都市で、住民ひとりひとりの地域で暮らす喜びと実感を醸成し、地域コミュニティの再構築につなげ、持続可能なまちづくりに寄与することができる、都市部ならではのエコミュージアムの学習活動として、その内容・方法・実際・効果と評価のあり方を考察するものである。</p> <p>本論文は全5章で構成されている。</p> <p>第1章では、我が国の希薄化する関係性と進行する高齢化による課題の解決に、住民主体の学習活動が寄与すると期待される社会的背景を整理し、主に地方の中山間地域で活発に展開されてきたエコミュージアムの学習活動が、都市部の郊外住宅都市でも効果をあげることでできる可能性について述べた。</p> <p>そのうえで、エコミュージアム及び住民の地域への愛着形成や学習方法等に関する既往研究を整理し、本研究の目的、方法と、典型的な郊外住宅都市の特徴を持つ神奈川県茅ヶ崎市を研究の対象地域として選定する理由について述べた。</p> <p>第2章では、郊外住宅都市における実践のあり方及びその成果について明らかにするため、これまでに実際に行われてきたエコミュージアムの学習活動の実践とその成果を振り返り、考察した。</p> <p>茅ヶ崎市におけるエコミュージアムの学習活動には、</p> <ol style="list-style-type: none">(1) エコミュージアムの基本的な機能の整備(2) 住民がゆるやかにつながることができる場の設定(3) 個性や愛するものが生かされる場の設定(4) 住民の交流と協働による相互作用が生まれる場の設定(5) 気軽に「本格的地域総論」が学べる場の設定 <p>という特徴があり、その20年間にわたる学習活動は、居住地域を段階的に知っていく、継続的な「たのしさ」を推進力に、トライアンドエラーを繰り返しながら、住民の主体的参加による地域における博物館活動の蓄積と、住民同士のつながる力（連帯感）の醸成に寄与してきた。また、その学習効果は個人的なものや一過性のもではなく、時間をかけて市内各所で波及効果を生み、そこから地域の文化継承につながる新しい活動も企画されてきた。</p> <p>それら実践から得られた考察として、郊外住宅都市で、住民が充実したエコミュージアムの学習活動を行うための「学びの仕組み」として組み立てるべき要素は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none">(1) 居住地域の文化・歴史・自然等について総論的に知ることができる本格的な「学習の内容」(2) 無理のない、ゆるやかなつながりから、自然な交流・協働が生まれていく「活動の場」		

(3) 活動方針や行うべきことなどを、学習活動に参加する「住民自身が選び取る経験」

(4) 活動の継続的な推進力となる、活動の多様な「たのしさ (楽しさ・悦しさ・愉しさ)」

第3章では、一般市民との比較によるエコミュージアムの学習活動参加者の特性を明らかにするため、活動参加者約100人に対し、質問紙による「居住地域に関する意識調査」を実施し分析した。

居住年数が長く、生活環境の利便性から居住環境に満足している一般的な郊外住宅都市の高齢者の特徴を持つ地域住民は、それぞれの参加動機によりエコミュージアム活動における学び合いの場に参加することから、

①知的体験の段階

②他者と協働する段階

③居住地域との関係性を実感する段階 (個性が活かされ、「居住地域のなかの自分」を実感できるようになる段階)」

という、段階的な経験と気づきを得ていた。

そして、そのことから、一般的な高齢者層には如実には感じえない、居住地域の隠れた魅力・課題等に気づく力を高め、自身との関係性を実感できる地域住民となっていくことが分かった。

そのようなエコミュージアム活動を長く継続することにより、主体的に「地域を知ろうとする」ことでつながる持続的なテーマコミュニティの構築の可能性があると言える。

第4章では、エコミュージアム経験による個人への学習効果及びその個別性と共通性について明らかにするため、活動のキーパーソン7人へのインタビュー調査を実施し、その「語り」についての計量テキスト分析を行った。

調査対象者が経験を通じて、強く得られると共通して実感するものは、住民相互のつながりができていく「人と人とのつながり」であった。他に、地域のつながりを作る人材になっていくという「人材づくり」、都市資源に関する情報等の集積と統合が進みネットワーク化されていく「知のつながり」、参加者が暮らす地域環境の日常的保全が図られていく「人と環境とのつながり」、次世代への文化の継承や世代間交流につながっていく「人と文化・次世代とのつながり」が、調査対象者全体が経験から得たものとして抽出された。これらは個人が経験から得られた効果が、地域に還元されていくという意味において、「地域におけるエコミュージアムの効果」であると言える。

個別性においては「世代や地域への関心」といった意識の変化や、「会員による運動」「地域資料や情報の相互利用」といった機会などを、それぞれが得ており、同じ活動の場で協働しながらも、そこでの経験から効果を強く実感するものや志向するものには、個人によって違いがあることが分かった。

その違いは、個人それぞれの活動に対する目的意識の明確さの度合いが表れていると言えるが、必ずしも参加動機とは一致しておらず、活動の時系列においても他者と関わり、多様な経験をする中で見出されてきたものであった。協働して活動を進める中で、他者に求められ応えてきた役割に関わるものや、いろいろな人の話を聞いた経験によって芽生えてきたものと言える。

第5章では、これらをふまえて考察した、郊外住宅都市で、住民ひとりひとりの地域で暮らす喜びと実感を醸成する、エコミュージアムの学習活動の内容・方法・実際・効果と評価のあり方を以下のとおり示し、結論とした。

(1) 学習内容

誰もが参加しやすい学習の入口と、本格的に居住地域の文化・歴史・自然等について総論的に学べる内容を用意することは、その後の住民の学習展開に役立つ知識基盤とな

るだけでなく、他者と協働する際の共通の考え方の基盤ともなる。総論の講師は、地域の文化・歴史・自然等を、実感をもって語れる地域の専門職員がふさわしい。内容が難解でも人間味が伝わり、たのしそうに話す専門職員から学ぶことは、住民にとって市政を身近に感じるきっかけにつながる。

(2) 方法

方法として有効なのは、「地域を知る」という共通のテーマで、学ぶ「たのしさ」を推進力に、住民同士の「ゆるやかなつながり」から連帯感を作っていくことである。同じ「場」にいることから始まり、学びの受け手やお手伝いなど役割を変えながら、協働することで、自然と学び合いのサイクルに入っていく。

(3) 実際

実際として、学習活動の主対象となるのは高齢者である。郊外住宅都市に住む多くの高齢者は、長年住み慣れた居住地域に満足しつつ、地域を「知りたい」という潜在的ニーズと、そのことに気づく人生のタイミングをもっていった。一方で、他の住民と必要以上につながりたくない意識をもっているが、活動に参加し、個性を生かし、たのしく生き生きと活躍できるようになると、次世代の住民たちも高齢者に尊敬の念をもって協働でき、活動が次世代へとつながっていく。

(4) 効果と評価

学習効果として、参加によって得られる経験を通して地域愛着につながる意識を高め、役割を変えながら行われる学習活動を長く深く経験することで、住民の居住地域への意識は段階的に変容する。また、長く深い経験から醸成される、それぞれの活動への目的意識は、他者から求められるものに応えることなど、活動に関わる他者からの影響によって芽生える。そして、それら個人の学習効果は個人的なものではなく、「人と人とのつながり」をはじめとする関係性を地域に生み、参加者が変わっても、時間をかけて地域の文化継承へとつながっていく。エコミュージアムの学習効果は、地域への波及効果や文化継承として反映されるもので、それらを活動のアウトカムとして評価できる。

(5) まとめ

住民は、エコミュージアムの学習内容から、専門家や市民活動団体と「みんなで地域を知っていき」、方法から「みんなでゆるやかな連帯関係になっていき」、実際として「地域を生き生きと語れる高齢者になっていく」。

それら「なっていく」ものは、地方部の中山間地域には残る、地域の「知のつながり」を基盤とした文化継承や、住民同士の生活に根差した豊かな関係性、そしてそれらをつなぐ「古老としての高齢者」の存在と言い換えることもできる。郊外住宅都市におけるエコミュージアムの学習活動は、それら都市部では失われてしまったものを、現代的なあり方で再編成するものと言え、その地道な継続が、地域コミュニティの再構築、そして持続可能なまちづくり、ひいては「新たなふるさとづくり」につながっていくものと考えられる。

そして、研究成果をふまえ、茅ヶ崎市以外の郊外住宅都市や、これからの都市部でのエコミュージアムで取り組んでいくべき学習活動の展望を、以下のとおりとした。

(1) 高齢者の潜在的ニーズを引き出し参加者ひとりひとりが役割を見出せる学習活動の場を設計すること

(2) 博物館学芸員等の専門家が地域へのつながりづくりへの意識をもって住民主体の学習活動に参画し、専門分野の能力を還元すること

(3) 確かな基礎的学習の継続と、「現在」を生きる住民たちにとっての新たな都市資源を掘り起こす学習活動へのアプローチに取り組むこと

4, 000字以内

英語の論文タイトルについては、センテンスケース（題目の文頭の単語の頭文字のみを大文字にする）とすること。日本語本語（全角文字）で125文字以内、英語（半角文字）で250文字以内とすること。特殊文字（ウムラウトやアクセント記号など）は使用不可。

The English title of the dissertation should be written in sentence case, where only

the first letter of the first word is capitalized. It should not exceed 250 characters in English (single-byte characters) and 125 characters in Japanese (double-byte characters). Special characters such as umlauts or accent marks are not permitted.